

MIC 第 59 回定期総会宣言

未知のウイルスによって世界は一変しました。

新型コロナウイルスの影響で、私たち労働者・市民の生活が脅かされ、「感染防止」を理由にさまざまな自由も奪われつつあります。日本経済は「戦後最悪」の落ち込みを記録し、賃金カット・整理解雇の動きも出ています。

しかし、こんな時代だからこそ、権力を監視して、市民に正確な情報を届けたり、豊かな感性をはぐくみ、時に傷ついた心身を癒やしたりするメディア・文化・情報関連の現場で働く私たちの役割がより強く求められています。働く仲間を共に支え合いながら、コロナ禍において、労働者に無理な負担がかかることなく、安心して働ける環境づくりがメディアの労働組合として喫緊の課題です。

特に職場や社会のなかで、声を上げづらい状況に置かれている仲間へ寄り添うことが求められています。

MICでは、2018年4月の財務事務次官のセクシュアルハラスメント問題以降、人権侵害の泣き寝入りが続いていた実態を痛切に反省し、被害者がきちんと救済されるとともに、ハラスメントの被害者も加害者も出さない職場・社会を目指す取組を進めてきました。「フリーランス連絡会」を中心に取り組んできたフリーランスや非正規雇用の労働者の保護も大切です。管理職や役員に女性が少ないジェンダーギャップの解消とあわせて、コロナ禍という緊急事態において、一人ひとりの働く仲間の人権をしっかりと守っていく取組をいっそう推し進める必要があります。

メディアの労働組合は何のために存在するのか。

この1年間、私たちの根源を問うような出来事が起きました。私たちの使命は、職場や社会の「自由な気風」を保ち、「物言う砦」として、平和と民主主義を守る礎の役割を果たすことにあります。私たちがそのことを見失ったとき、「大本営発表」や「国威高揚」というプロパガンダ一色に染まってしまった戦前の過ちを繰り返しかねません。昨年、日韓の政治的な対立が激しいさなかに、MICは韓国の「全国言論労組」と交流を再開しました。香港で進行する言論弾圧に抗議するとともに、日韓両国のメディア労働者が力を合わせ、東アジア地域において、あらゆる報道で真実を追求するジャーナリズムの本分を守り、平和と人権が尊重される社会を目指し、言論の自由、表現の自由を守り抜いていくことを誓い合いました。

レオ・レオーニ作の「スイミー」では、大きな魚におびえていた小魚たちが力を寄せ合うことによって自由を取り戻しました。不安が世界に広がる時代だからこそ、幅広く連帯し、ボトムアップで自由な職場と社会をつくっていきましょう。

2020年9月26日

日本マスコミ文化情報労組会議第59回定期総会